資料館ノート　第 133 号　　令和元年 5 月 16 日発行

杉浦日向子の視点 ～江戸へようこそ④～

杉浦日向子の江戸（2）

江東区深川江戸資料館

本号では、前号（資料館ノート 132 号）に引き続き、江戸風俗研究家・杉浦日向子にとっての「江戸」を、食や文化などの面から紹介します。

1．江戸の食

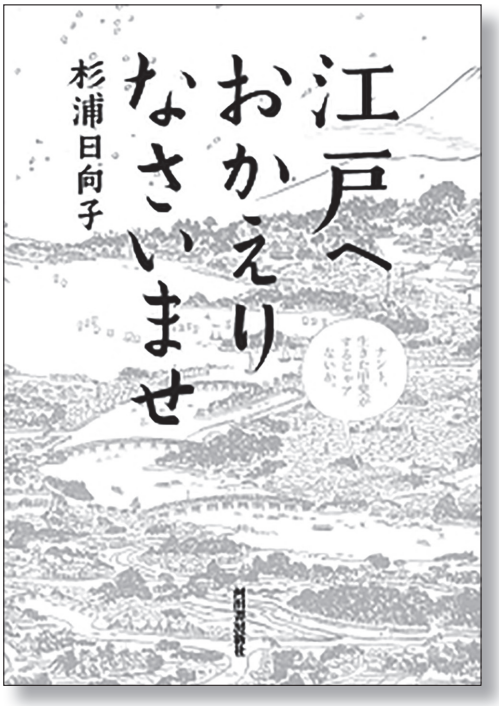
食の江戸前四天王といわれるのが、天婦羅（てんぷら）・鰻・鮨（すし）・蕎麦です。「江戸前」という言葉は、江戸の地のものという意味と江戸スタイルという意味があるとしています。また、これらの料理の共通点は、江戸時代に全て屋台から始まったことです。

初め、天婦羅は動物の脂（あぶら）を大量に使って作る南蛮料理を指し、語源はポルトガル語のテンポウラ（調理する）といわれています。京坂（京都・大坂）では魚肉をすり身にして揚げたものを指しましたが、江戸では手間を省いて串に刺した魚の切り身を揚げ、屋台で 1 串 4 文程度で売られたものを指しました。

また、鰻の蒲焼きは、初めは身を開かずブツ切りにして串に刺してあぶって食べたスタミナ料理でした。のちに江戸前に良質の鰻が大量に捕れるようになり、それを開き、たれをつけて串を 3 本刺して焼いたものが今日に継がれる鰻の蒲焼きです。

江戸前の握り鮨が登場するのは幕末に近い頃で、文化年間（1804 ～ 1818）の初め頃に深川の「松がすし」で考案されたといいます。それまでは、飯と魚介類を酢で発酵させた「熟（な）れ鮨」と「押し鮨」しかありませんでした。江戸前が登場する以前は、魚偏に作るの右側の「鮓」という字がつかわれましたが、江戸前登場後は魚偏に旨いと書く「鮨」という新語になりました。

蕎麦は、江戸時代以前からあった「蕎麦実雑炊（そばみぞうすい）」「蕎麦がき」として食されていました。江戸時代中期頃に、現在わたしたちが蕎麦と呼んでいる「蕎麦切り」が登場します。以後、江戸っ子の好みにマッチし、市中に無数の店舗が開業します。杉浦は、ほぼ毎日食べ 3 日も食べないと体がおかしくなるほどの蕎麦好きで、「ソバ好き連（ソ連）」という集まりを作っています。



『江戸へおかえりなさいませ』
河出書房新社 /2016（平成 28）

2．江戸の文化

江戸時代の庶民の生活の中で浮世絵は、情報を伝えるという意味で現在のテレビのような役割を担っていました。遊女や役者、力士などを題材としていてブロマイドとも言えます。江戸に来る人たちにとってのお土産にもなりました。浮世絵師は画工と呼ばれ、他に彫り師、刷り師がいて、ひとつのチームのようなものです。その中でも杉浦は、江戸時代で最も自己主張の強い人として葛飾北斎を挙げ興味関心を寄せています。

北斎も描いていた春画は、一般に「笑い絵」と呼ばれていました。春画のことを隠語で「ワじるし」というのはそこからきています。つまり、おおらかでユーモアたっぷりのものです。春画本は、山東京伝、滝沢馬琴、十返舎一九、式亭三馬なども手がけています。絵師も、喜多川歌麿や歌川広重などが描いています。とりわけ、渓斎英泉は「俺は春画描きだ」と公言してはばからない絵師です。

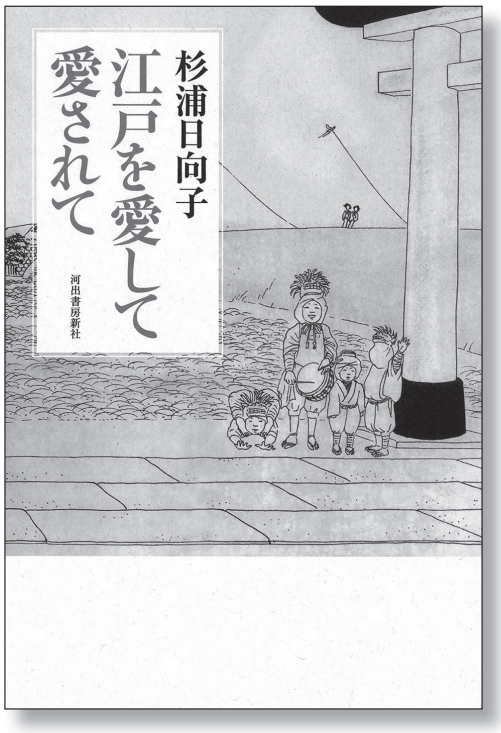
3．江戸の三大娯楽

歌舞伎、相撲、寄席、浮世絵―。江戸からは、世界的にネームバリューのある日本文化が生まれていますが、江戸文化の特徴は、そのいずれも庶民が生み出している点です。

一つ目は歌舞伎です。歌舞伎は吉原とともに「悪所」と呼ばれていました。そう呼んでいたのは、もっぱら為政者側でした。その熱狂的なパワーが手に負えないからだといいます。江戸の人々が、どれほど歌舞伎に魅せられ、そして吉原に熱くなったか。それは、現代の私たちには想像もできない位に物凄いものだったに違いありません。

二つ目は、遊廓です。新吉原は明暦（1655～1658）から始まりました。それ以前の元吉原は日本橋葺屋町にありましたが市街の発展の結果、町の中心近くになった為、幕府が風紀上よろしくないと判断して、当時、江戸の辺境であった浅草にその移転を命じました。規模は新吉原になってから格段に大きくなりました。なお、遊廓は幕府公認の吉原に対して非公認の岡場所がありました。「岡」とは「ほか」の意味。深川には岡場所が七場所あり、吉原に対抗する人気を博したといいます。

三つ目は相撲です。江戸時代の相撲は、入場料の木戸銭を神社仏閣の修繕費にあてることを名目とした勧進相撲で、神事としての芸能でした。力士は「1年を20日で暮らすいい男」と言われ、浮世絵にも数多く登場する庶民の大スターでした。歌舞伎・遊廓が軟派の遊びで、相撲は硬派の遊びでした。杉浦は、江戸時代の力士である雷電為右衛門がお気に入りであるといっています。



『江戸を愛して愛されて』
河出書房新社 /2016（平成28）

4．江戸の三男

現実にいる男たちの中で、江戸人の選んだ「男の中の男」を「江戸の三男」といいました。

一つ目は火消の頭です。火消の頭は、町内の顔役です。どんなもめ事も、頭が顔を出しただけで丸く収まるくらいの貫禄です。命知らずの血気の若者を数百人従えて、火事となれば鬼神の働きをします。信頼の厚さはトビキリです。頭の魅力は侠気でしょう。

二つ目は力士です。力士は、待ったなしで闘う勝負師の心意気。年に20日間しか働かないのに、金持ちで気っぷが良く、豪快に遊ぶ。江戸時代、相撲は女性が見られない時代ですから、力士はより男っぽい職業だったのでしょう。歌舞伎になった「め組の喧嘩」は、火消と力士の喧嘩の話し。どちらも血の気の多い人が集まっていた故と言えます。

三つ目は与力です。杉浦は、三男の中で一番おもしろいのは与力だと言っています。与力は町奉行の配下で同心の上役です。体制側の役人なのに江戸っ子に愛されるのは、それなりの理由があるようです。与力・同心は「八丁堀の旦那」の異名のとおり、下町のど真ん中に住んでいます。そんなわけで、町人との付合いも多く、言葉も「来てみねえ」「そんななァ嫌ぇだよ」なんて町方の言い廻しでしゃべります。だから「ござる、しからば」の侍言葉に比べれば、とっつきやすいのです。

杉浦日向子は、漫画家や江戸風俗研究家など様々な仕事を通し、刊行された書籍や漫画、その他メディアなどから、わたしたちに「江戸」の魅力を伝えてくれています。

【図版以外の参考文献】
『江戸へようこそ』（筑摩書房 /1989）
『大江戸観光』（筑摩書房 /1994）
『一日江戸人』（新潮文庫 /2005）